

重訂東集

911.3
キ
下



下巻目録

備文庫

六紫湯をや

九本の下り

七秋をさす

七ハ九四

七秋をさす

七夜のあや

七秋をさす

七猪藺を

七秋をさす

七新麦ハ

七秋をさす

ハ十三夜

七秋をさす

ハ雪をさす

七秋をさす

ハ雪をさす

七秋をさす

ハ雪をさす

七秋をさす

ハ雪をさす

七秋をさす

ハ風流の

七秋をさす

九五人技師

七秋をさす

九五 笠根越え

七秋をさす

九五 傘下り

七秋をさす

九七 早く咲き

七秋をさす

九七 甚くハ

七秋をさす

一二 市井を

一 牛流し
 二 若くし
 三 程草や
 四 十六番ハ
 五 世々々々
 六 何生く事
 七 秋ちくき
 八 牛流し
 九 やくき
 一〇 三三三
 一一 志くもの

右分仙

一 ねきてり
 二 水くし
 三 旅人と家
 四 旅病
 五 薬弱
 六 江戸橋
 七 野あり
 八 本枯
 九 文月や
 一〇 砂署志
 一一 右五十首
 一二 右十二句
 一三 生なり
 一四 ねね
 一五 精吟乃
 一六 名月や
 一七 みなおめ
 一八 月あり
 一九 月今宵
 二〇 砂る奴

一 空乗
 二 世々々
 三 杖のねと
 四 水高下
 五 白髪ぬく

右半分仙

一 志あり
 二 九路
 三 幾あり
 四 世か
 五 世々々
 六 世々々
 七 小傾城
 八 外買
 九 仙や
 一〇 九時
 一一 松歌
 一二 焼飯
 一三 宝炭や
 一四 能家や
 一五 海川ハ
 一六 海川や
 一七 芽出
 一八 世々々
 一九 世々々
 二〇 八きき

右表斗

子 諸 衆 凡 珊 菰 衆 障 凡 珊 菰 衆 障

曲陈
石 顶 翁 石 顶 翁 石 顶 翁 石 顶 翁

房志 硤 畝 看 為 硤 蕙 肩 畝 肩 志 乃 硤 房 畝 硤 乃

探志

西番 昌房 文考 及肅 楚紅 志 秀 意 孝 房 秀 和 通 志 肅 房

牛全坡葱全牛葱板牛全坡葱全牛全坡牛全

佐園

芭蕉 支那 惟然 考焉 然考 焉然 考焉 然考 焉然 考焉

店、店、店、店、店、店、店、店、店、店

史邦

水部 水部 水部 水部 水部

竹橋の内にうろたへて居る
るれ葉をくぐりて
夕暮の光を透して
とてぬきつる
橋の吊
籠うゝまゝに
世にうゝまゝに
おぼひの
百里の海
の刻
言を
以て
ゆゑ
招き
子
小
二
先
百

邦道邦道邦道邦道邦道邦道

十三夜曉暑けをくぬれ
小袖の裾のこけを履ゆる
焼飯のれり袖口は明き色
荏苒麻のうに軍雀つく
雨を待つは夏の暮るる
こみき流る風呂のりき
切麦を子ね新はすき
来手ぬりて桑橋の界
松林ををけり掛る寺の門
むらやまをたれおのこ
ふ乃身をもかくぬき
なまぬきぬきぬき
月夜麻の夜の新法
あけぬきぬき
未度を行ふるは
茶やちりり
先けとまを
くぬれぬきぬき

痛きものを懐とうとて一帯切
 中絶くちなるむはうのさえ
 是是きよ庭をて庭場のあり
 新しは 仙をぬきあうの好
 雲をゆく庭中の牡丹をて候
 あはきき川にくちをさき
 是うりしきれ道なきあはれ
 是ハむくみてはあめりき
 まれきき庭中の牡丹をて候
 伯母のききき砂人の新
 まの月言きき庭中の牡丹をて候
 枝もく菊乃うききくちをさ
 新きききききききききき
 うきききききききききき
 初きききききききききき
 信しききききききききき
 新きききききききききき
 まるききききききききき

邦 紫 仙 乃 子 景 良 子 美 良 邦 乃 仙 紫 邦

新きききききききききき
 雲をゆく庭中の牡丹をて候
 あはきき川にくちをさき
 是うりしきれ道なきあはれ
 是ハむくみてはあめりき
 まれきき庭中の牡丹をて候
 伯母のききき砂人の新
 まの月言きき庭中の牡丹をて候
 枝もく菊乃うききくちをさ
 新きききききききききき
 うきききききききききき
 初きききききききききき
 信しききききききききき
 新きききききききききき
 まるききききききききき

通 川 五 通 仙 乃 子 景 良 子 美 良 邦 乃 仙 紫 邦

仙道通川省仙道通

岱

五言古詩
綠陰夕雨飛朱粉
友又

第柳紫爲川爲紫柳川爲紫柳川爲紫柳

焦菴吟

常紫

[illegible]

執 爲 坡 爲 股、爲、股、爲、股、爲、皮 爲

執事

史邠

沽圃

魯可

邦

翁

圖

9

12

乙軍
治別里治制圖

邦國萬國萬邦萬國

芭蕉

言振誠を今とあらしめしもの
船は焼かぬを　へり　雲の系
ふら下布細にきるおんえで
扱むけはく　芳乃中ゆく
さのおまゝ居ぬ月のはれ碑
都くもをあくるおまの夜
燈子は給羽織も極めよて
食早橋くさいさ四合とくろ
神主も常大うと鳥帽子を
埒なくむく救の下刈
そやくと還街の流し落物て
後座よりおれ　念　佛
志のいへるをわきて極み
厚名をれつる月のかけさ
ときあはゆる眉たまたま
人なりたる　おをあるを芳
美のせよと猶を蹴すする
そのうち梅を植る幕串

芭蕉

其

[illegible]

人勿為虛字勿水其虛人行氣勿人字勿

鳴鶴

西日北風
散下州

馬のふり： 馬のふり： 馬のふり

村小福葵一盤四粒

(Faint handwritten notes at the bottom of the page)

乃述其子履端所口授

為

此書之出 可謂 萬幸 矣

入夏首 初秋の晩
薩 俣 結

西次半程の記

盧荊水竹山莊集

爲有

珍為佩珍為佩珍為佩珍為佩珍為佩珍為佩珍為佩

星川雪松軒

中頤

[illegible]

子牛反子

物をよ申合はるの病はる
 俾歩乃歩又料理先へ月
 楓代はとさう次と風の雪海を
 鹿もむさハめ方虚云えたる
 暖火と云は後を成る青の月 雪川
 月もくは那さや種の中 如行
 地も早田が裏をく 松星
 合兵乃ゆり男をけあくる 夷始
 服乃とやう信れうさ 萬自
 本も抱負くのそく 菅庭
 作少なりあうそ 赤根夢佳
 日や少島と 上田のお糸
 夏の服も男方次る 毎の家
 荒れあうそ 鶴 二より
 隠あひみのゆりもる 信也
 け月あうそ 終る 櫻散
 むうかう花は日日照る 雨う降る
 ありハめ方とさう 雪

行 始 星 川 星 始 川 行 始 星 川 星 始 川 行



西中

子辰

幸ふ押かたなりやあふそ
 夢さうさむ 蟻の葉片
 懸月やうそ 夕煙のあふそ
 火のまのま 焼いあうそ やう
 洗濯とさうそ ゆきのうさう
 はめうねうそ 又あを吸物
 酒入虎の入るやうそ 半のま
 黒透乃 松の押合うそ あり
 さいさうそ 唐草の葉をま摘
 ちあを黒さうそ あをあうそ
 伊勢のつぎ又あをとさうそ
 おこー 夢さうそ 乃をの砂汰
 金耕乃乃さうそ 運うれあ
 の由る日利乃浦の初居
 秋もよあうそ 唐草
 鼻さうそ 子乃 幾やあうそ
 左なりすうそ 乃花うそ
 瓢の輝と拂う 麻う 孫

子 辰 子 辰 子 辰 子 辰 子 辰 子 辰 子 辰 子 辰 子 辰

酒霜月

七

九

芥焼やほそこの四升代和布
 帯と雲——卯うじ鶴
 織おらふ緒と遊ばるゝて
 おくく——心 裏は初の本
 着目取干鰯俵乃腹く
 腹くじ牛をたぬ 物賣
 家おろし小村をたぬとあき入
 板の五郎——殊に連電
 あさり おお堀堀の旅く
 場かふらきとありぬる系
 日盛ハ強きもの同持さく
 和回秋父たひとうあ黨
 柳毛のきくハ初を系——多
 うた——く——き月の技打
 虫とく——聲け雁のけ
 初とく——きくハ初を系——多
 高ハ初を系——きくハ初を系
 破筆ハきくハ初を系——きくハ初を系

雪ふハ春やうも紫れく
 日記はまじり——一帖の紙
 縁やまふ年月の赤白
 名付むとく安藤の唐紙
 老伝はえ新ぬ泊ちやうく
 え来たり酒乃男取
 焼うそ屋は纏るるの月
 巻きたるうと帆をさ風
 音響ハ飯粒たましとまけけ
 憂き名を辰の市く忘れる
 能くとりとる唐紙海や
 紫と茶と垂る不と床の片隅
 杜宇はにやと故やと約けけ
 湖のえきとむ湖田のわき
 為雪の上は雲のころくと
 儀乃夢ととととちるもの
 折あふ子休のまじり袋町
 あり松樹も玉砂のま

道子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子 紫子

よく咲け九日を下省の葉
 云うきあ川春月のあ
 彩島まの勢の啼もく
 子うとと山乃ちる
 酒香のふせり清子とめ
 なほおふ——文を想ふ
 足の葉たそ神をまめさ
 二人のまきまやあぬ
 角——腰をささる
 子あつらひまき
 飽果——腰をささる
 歯ぬまやたて目も
 月宵くは中あすてか
 一樽よあけら山の花
 壇まふいこ春のあみ

人 西 口 香 紫 柳 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫

為雪の上よ雲のこ
依り垂とくくたるもの
おあま子依のまゝる 袋町
いの松 枝も 乙那のま

子 恵 美

九七

左研會

ちるる

よく暖け九日を道下者の葉
かうきふ川 春月の家 花柳
彩鳥まきの鶯の啼もく 路通
きうとくくく山乃きるる 文鳥
酒客のふせり 藤子とめさる 歌人
なほおふくくも 文を和ふと 如行
足の葉たそく 神をまめさる 荊口
きくく 淑問まきく 雲うきめ 山筋
二人めれ妻よふや ぬめく 木岡
ふはる 舞く 膝まきさる 油香
兎角く 雲さる 雲さる 山く 草長
み物乃うらけ 雲さる けし 料理
飽果く 膝まきさる 雲さる 柳
雲ぬまやふく 雲さる 雲さる 雲
月雲く 雲さる 雲さる 雲さる
雲さる 雲さる 雲さる 雲さる
一様よあきさる 山の花さる
雲さる 雲さる 雲さる 雲さる
人 西 口 香 美 柳

國旅師高良外標人通口蘇國高良師

卷之五

九

[illegible]

蜀川 嘉陵川 岷江 漢水 嘉陵川 岷江 嘉陵川 岷江

九

屋土山田氏の事

壬辰

水鏡帝と云ふや依屋泊

苗乃事とあるをよむ

船風と云ふ答胆をよむ

追子の内と云ふ金と云

さふさふ暖簾と云ふ月の精

能く後と云ふ力と云

耕作の事と云ふ初秋

豆膏味と云ふ伝説海と

尻ぬの細うと云ふあやう

雨代降目を書と云ふ

施福乃と云ふむ蟻の足

蘭と云ふあまうと云ふ

切と云ふあまうと云ふ

川旅乃と云ふあまうと云ふ

うと云ふあまうと云ふ

袖と云ふあまうと云ふ

嘆と云ふ二腰と云ふ

所ひと云ふきんけと云ふ

苗川

赤湊

苗川

湊

苗川

湊

苗川

湊

苗川

湊

苗川

湊

苗川

湊

苗川

湊

為邦景惠水務原邦惠為邦景惠

去冬成

彭堂 普子 黃山 柳障 銀杏 普杏 最 山 鄰 普 貴 吉 山 普 堂

一田 此亦秋時也 亦前通なり
新下りけりや 秋の星はく

角乃言 ぬらあつきの 栲 式之

一つは鶴の ぬら 栲 芭蕉

またふは川 一回面も 夢斗

直乃夢をあつたの 夢の月 村歌

腕揮活き ぬれころも手 梅市

若殿の 簾れ 中の ちりひ 梅額

ふらふの小 福 可も 宿まじり

燈 灯を ぼほと ぬり 蓬の若

御衣羽織をすこし 匂い 浦く

と 石まゆく ぬい 古き名保の ぬを

有明の 何事 晴子 値をかいせ

走つらり 青 山の 社

手那ひの 衣を ぬき 新

籠子 子 居く ぬき ぬき

杖 杖 登り ぬき ぬき ぬき

戸 あり ぬき ぬき ぬき ぬき

戸 あり ぬき ぬき ぬき ぬき

戸 あり ぬき ぬき ぬき ぬき

戸 あり ぬき ぬき ぬき ぬき

百額 之 美 村 市 額 面 之 斗 意 額

寺乃まゝ様ふを病とく
 翠簾代屏風は西く獅子
 面影は打かゝりたる唐園
 有る乃移る風はあゝを
 けうくと雲乃吾れをさう
 群は雀の散りてを ねく
 紫雲の市代酒は酒買ふ
 明日は種蒔の月も晴る
 稀雲は赤清なうと海も
 家よはさともやあゝの牧
 子休まゝ休まゝを多に
 千本は唐よりみゆる様れ
 物あゝと知の忍辱をけり
 幕を志はさるるを
 鶴乃うゝと香のを那まや
 畑おあゝとをねる 陽を
 とつゝの村場あゝとを挽く
 院よりはあゝを 一房

村 市 走 意 彩 之 美 百 村 之 市 村 之 斗 美 頼 村
 村 市 走 意 彩 之 美 百 村 之 市 村 之 斗 美 頼 村

一五

秋ちうきむの夢や 四つ中
 志とらんふけの 梅子の夢
 月影はあゝの光を射る
 起ると 雲より
 飛つゝ丸をみよの一言
 夕食をくく 隣の煙を
 何の言もをさるる 大きな
 宿くく 咄の夢を 喧嘩は
 くらぐ 吾れを いる 森
 仏壇の煙は 四の作り
 標くく くらぐ 森れ 秋を
 ハ朝の煙は かく 仕舞
 森は乃 結の煙を
 西員院ハ地早は 代を
 折高は 醫者ハ 電
 結那く 細繩は ぬの垣
 足袋脱く 下足の 陽を

考 市 走 意 彩 之 美 百 村 之 市 村 之 斗 美 頼 村
 考 市 走 意 彩 之 美 百 村 之 市 村 之 斗 美 頼 村

種芋や菜のはらりと賣出外

岩壁よりけを彫りたり

酒好のやうも強をたふさく

ぬきうういさ草花にふも

有明の七ツ部なる某院イ

いさこれれと付添いさ

和風は性戸にあら疎入さ

小使のくもまにあつてはる

屋とくと矢張の川を^{イの}出後

多賀の抄子もい川の工子

手挽の男もさうして三輪組

人よれ流くさき冬に張い

萱草のふもかりぬをさ

秋の川蟬乃啼死さう

月多くと石屋根おさ月

こぼれてささ菰瓶乃露

葉のまの多葉はさるる

板北の葉ある水のかさう

才殘

土芳

良品

殊

殊

殊

殊

殊

殊

殊

殊

殊

殊

殊

殊

殊

芳 孫 不 道 芳 孫 不 道 芳 孫 不 道 芳 孫 不 道

卷之五

酒堂 史邦 大妙 玄素 覺帝 正秀 道望 邦卿 未帝 秀道 望卿 邦卿

人心常陸乃ふハ多ク人衆
春月すくも寝きおちりけ
うさるをてけは後で床より
細買あつての床よりきぬく
硝子に減除を申す茶酒
標嘆へむ——
伊二かへる
ゆむは床所よりきぬく床後
明るの床の太敷あつてと
大いハあつて——
極なるあつ
力ハあつてぬ床よりハあつ
けるさるさる中のもはた
散々——きぬく思ふ乃月
白いあつてきぬくし秋
すいもあつて子あつて
あつて——
お見あつてきぬく
油揚げやぬきぬき
あつてのあつてきぬく
やけあつてあつてきぬく

子榮 子榮 子榮 子榮

卷之五

成秀

絡通

太
甲

惟

瘡腫

正則

楚江

賦重

韋

三 乘 卷

工 部

五

6

七

五

2

1

けなくと帯を束ね板敷
 舟乃とも月夜を初めり吹惟然
 船月小翹先く尾をさしし土芳
 正んえとる 燈豆磨ききき雪芝
 二ハ乃より舞する 細小師猿雛
 師その執又編まも玉に色道
 瘦なりく多仙可く川表卓紫
 雲中へ牛を徳本とさす九節
 嫁へ代まゝ振やまはつはへり
 杖と糸履を脱いでおく
 一くぬきとさるる白萩萩
 新納^いカカく此秋
 右きけいさうて四もも細き意
 昔妻新とさす帷子此裾
 立なりく文事て意店の溜
 鉢持さすく祖母の伝説
 まん丸は花の本陰乃一色一
 何とやとさす北の春風

芝 聚 所 雛 道 袋 雛 煮 芳 雛

符

下

欽
生

曹氏

小枝

生

符

枝

良

箱

生

庚

支

1

7

2

才

7

...

五

おもひく虫よきものなりと
むく紙高つとてお清暖
あう侍をみち掲ぐ重宝
離くふ箱乃ち毎にぬく
幣乃ちや赤紙は種かん
けいのもくを掲ぐこゝろさ
寄来紙本要ふふ角おく
月鏡してふくし後る月
乃のふくし鑑ふふのち
さうくくくくくくく
新社ハ標の美生のさく
病の愈へふ切るく
一ふくくくくくく
何ふくくくくく
使くくくくく
くみくくくく
く山くくくく
くくくくく
くくくくく
くくくくく

生校良 生校良 生校良 生校良 生校良 生校良 生校良 生校良

思ひま本雪やに月の様物
 糸の杖つゝ岨のなむさ
 牛のさる乳を呑み歎みそ
 かきうふゝ梅の竹のわに柳
 休つゝも葉の緑々細腰り
 ひとゝもをさるる明の松
 片雪の涙のそ寄は海糸で
 粗軟の傍に花をさるる
 ろ如紙は洞をつむむあ
 ろうけの糸ふ上の袍り
 黄くら束束の葉は裏まで
 りる車のさゝりく

東菰 桂搦 叩端 桐葉 工山 菰 荻 閑水 楫 葉 氷

三勝 壺さし 有る 小は 戸は 弱り

桐葉 荻 葉

水 田 水 田 水 風 水 魚 ○ 菜 ○ 菜 一 瓜 一 菜 水

一井 截人 昌黎 芳兮 楚竹 東睡 人井 聖兮 作睡 道人 碧

帳幄の壁を抱ゆる雪月を

眺めるくれ 芦の穂代上

雪の印跡を隔る松とみえ

雪月にはさする石原乃雪

八月廿九日他 旅する我をひら

業の空をまをとおやとれ

山ちとる雪も 旅のさばくを

まよひ身やと酒造るト

夕霞月よまをり 鞠の着

白き如様のの地を産越え

旅をを様の極よまらうと

乱れし髪とまをる旅

個多形見の散るも 出ま

何も雪月を皆そとる

梅の月一の空よ 伴旅

旅つき初し 東のやみけ

みつて代已く 旅を

四十雀とる 旅を

芭蕉

荷

旅

旅

旅

旅

旅

旅

旅

旅

旅

旅

旅

旅

旅

旅

晴晴雲乃あうふ舟家く
現をわしく白うきくさ
髪そけいなるうき舟の
ををわううき舟の
男の妹うき舟の
かみうき舟の
老の妹うき舟の
子ぬうき舟の
あうき舟の
ぬきうき舟の
甲斐伝院月あうき舟の
つふをわきうき舟の

右の仙よふき

舟 柳 川 舟 柳 川 舟 柳 川 舟 柳 川

一三六

本枯うき舟の
毛をひく
掛念の中
梨の枝
桶ふき
秋風
満の
六月
舟の
葉を
藤の
月代
舟の
舟の
舟の
舟の
舟の

舟 柳 川 舟 柳 川 舟 柳 川 舟 柳 川 舟 柳 川

香雨の髪利児うなみさ
香い色くくましくけ文
良

元

割一所りく 右字

軍不有師の駒幸く為後
色者やふ初刈の爪 良
けりしは踊ふ急く布つて 色

山方十句中レテシレフ

秋風了る父の徳 立
かのそと錦も包拾ふ
終て継きり玉の古堂
我様く小松ふきの名を
面乃あふきの月と書
費をいふ車もかうさ
一むかひも人訓く飛
金山徳テ小砂と拾ふ
料のむくく書陰の電
也 右 書 義 衣 也 右 書 義

人字一と一との所家
松柏るく風の音ま
子を射させり 猿乃衣
候り名代袂をぬり
從古乃月少く台
捨皮むく老の尻乃
志くくく家の海ふ
塩濱の廻村乃廻り
居あは波のま
かむさく地着の
鎌磨あり 里乃
後と下り けりし物陰
此階を尋くふ乃
衣本銭 衣よく 梅の
良 良 右 也 書 義 也 右 書 義

信房松屋堅房の書
金と斗骨玉持

張黑智手每子進小凡

秋の月夜歌一景

月より切腹をせよと云ふ
尤佳

遠方より
村の生垣
ノ

癰疽のつとるくち樞の著

小桶以清為
臨子明之

七川より生長しつゝ姨の恩云

高教
乙卯

讀書乃其地

消色元雲の如月

服藥之味永矣

おのゝきふはー 紗子 桶 流

少河屋ハワシを中と縁起

乃境自

糸うて 痛ろま 糸うて 糸うて

あづき 踏 子 孝山の重

44 年の戸地 予より之に託せし者なり

何有古之幾矣

張子故_レ給_レる_レ爲_レ實_レ外

傳番 イニセ ありしは 漢語

夕尺の光を横手より照く

うは楊子と嘆く語以

男をそゝめ二人連りて居る

十、ふち、け、並、雲、の、明、す、の、

蠶黃を同利の由は所付

大なる指、交のり、
イ

大木乃栢、枝のちむく
聖ふ者有るに二方と表す

イ イ

山依りて只ぬきまゝに
雪ふ春をくくニうと儀我

イ 一

山はくつ只放て来て机碁
一里坊下七宿と上り

一里外ても布どとる 旅
 魚の 布袋の鼻 四丁

金の布袋の象月より
百代をへとふにいくとる

百十卷イハと云ふ記をくせ唱
結ぶの面ありといふの二

秋田の西より、川の上
 岸ハ海をす川あり
 一

生後ハ海を中斷あるに
みの六跡ト正倉の雲梯ハ

みのみちのつち
やうとまゐるゝまへに
い

電り 清き水
 照る 雲を走る 風
 おのう 志は 海へ 流る 潮
 今川屋 江戸 町 中と 縁起
 所 免 咄 ゆる 必 乃 院 目
 糸 うちて 腐る 子 家 ぬ 小 恵 衣
 あ 踏 へ 幸 山 の 屯
 帳 の 戸 代 寄 へ へ 匠 聖 老 中
 如 月 へ ち へ 幾 々

泉 流 志 急 校 口 浪 生 衣

明倫彙編
家範典
孝行典
卷一百一十五
孝行典
卷一百一十五

中川卷八 聖女！ 終不
恙

系うて 病に身をまかせ
病に身をまかせ

44の戸の蓋をひいて

義
文
合
芝

作者の石を渉針

[illegible]

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

大木乃梢、枝のありて、
イモ

山依了只依了事了九
一居

布袋の裏に
イ三

結ぶの^{イニ}る^ニと川の上^{イニ}芳

みゆみゆしむのうたひ
道イノ

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

杖の杖とうち寄しゝふ樹あり
月よりほらちやんきよよく
西の山よりほらちやんきよよく
いゝゝ牛のきゝゝ即ちきゝゝ
買のきまんまや買ふきゝゝ
小社と叫びてわゝゝ大年
使やる所とさゝと折れられ
型てて医者のもちきゝゝ
拭いゝゝ樹ゝの樹ゝゝと
きゝゝ樹ゝの樹ゝゝの樹
れよりきゝゝ樹ゝゝの樹
きゝゝ樹ゝゝの樹ゝゝの樹
海のものね八雲ちんゝの樹
雨きれ月の樹ゝゝの樹
大ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
七樹ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
アゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
小枝ゝゝゝゝゝゝゝゝ

車庸 酒堂 遊刀 漁斗 暗也 支者 為 堂 考 我 庸 力 堂 け

ちろゝ樹ゝ樹ゝとをきゝゝの種
一羽別ゝゝ 千鳥 一群
枯るゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
田中乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ
月毎ゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋風ゝゝゝゝゝゝゝゝ
露の系録ゝゝゝゝゝゝ
師ふゝゝゝゝゝゝゝゝ
磯乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ
傾城ゝゝゝゝゝゝゝゝ

松江 泥首 依之 色良 風泉 夕氣 苔翠 帆筆

松江ゝゝゝゝゝゝゝゝ
隣ありゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なるゝゝゝゝゝゝゝゝ

詳六 色菫 筆

唯唯くは彌の月ま何く
傍まておく電う初收
彌細干場と書書の離子
編並和う入る何由
非明の草は影いとひきき
と言ふれと地やもあや

那 末 六 直 良 卯

おき雷

如風

秋もやあ葉の比乃あ葉
剛士乃 薪と手折あ梅
沖車代書とまら雪うま
神と和くくつと夕月
あや代夢ほうき花の風
かしこらまふと代篠庭
ま仙あり里まあ

色道 安信 童辰 自笑 知是

えん去器

知是

梵版や伊良古の雪ま能く
あさきくく一歌是の海
いづう鳥帽子乃ぬきあは
何年 馬代あふぬ暖さ
雪とわくま 掩書の月

誠人 是 意 人

あき雷

幾葉紫その花 神とわくは
猿鹿乃 雪とくまあうま
くまの月若くあはれ 歌書く
里の踊り 雪菊 折る

折る 色道 知是 野水

寒窓菴小橋ゆ

誠人

五葉やけく小橋と雪乃と
雪とくく雪はけくの松
雪の子と雪と雪の雪の雪
雪の雪と雪と雪の雪の雪
あふあふ雪の雪と雪の雪
雪の雪の雪と雪の雪の雪

知是 色道 人 是 其

あられしきほや精金あり
ねれ文さき竹さくらあき
あけき撮とさきあき磯原ふ
いめりやきとさきあき魚
いさき山ようきあきさき月
鏡つくたき子ほく
ま
芭蕉
野水
荷兮
夕道

七

諸家や雀より子雀戸の秋
 無きしに心より望み来りしや
 折波生れぬ乃編橋雲とめて
 月乃曙
 信
 足
 信

いふはとて顔面うゝとておあはれ
高きよりあつて枯木乃松あり

本賦刊下易小變と柔答一、重九
松等一、玉と厚月と相需杜必
能よ塔 如月人 月と海翁
心より小橋とすうに收阜山塾水

聖
合
凡
生
七
女
辰
黃
子

風
瀑

春の如小橋のあゝ
 初寅のそゝめけ市又月和けて
 物とく月入まゝ古あつて
 牛車つまゝ雪のふりやまゝ
 雪の

杞里

西晴く雲乃也嘆く徳ん流
山川是乃物子啼むる蝶等錫
夕食ふ子姉ふか雪は月出く
秋来ふとくと布ぬくる心
重良

高きよりあつても

本賦判り易ふ小燈と希客なり、重五
松等より玉と春川と新雪杜必
新は松 かしん 月を海 翁
ひつろ小橋とすうに岐阜山 塾水

そまのちよもぬきうりき

あつて入目りくとも春菴は

付く

風瀑

一四六

春乃知小橋のあつて
初寅のちめけ市は月和けて
物とく月入るま古あつて
牛車つきてるあつて
一品
琴房
季内

かき

楓里

一四七

西照く雲乃ち咲く後んれ
以川走乃物なりあつて
夕食くあつてあつて月出く
秋来はまうと布あつて

下巻

寺島秀助事也 とき

一五

啼きや海へ入る雲上川
月夜中をなほ波のうき海松 今道
黒雲の飛り度のをめく 不下
紫と雨よりし雲より 定連
機より乃ち数他より市を 寺良
新しきもうけの宵月乃ち仲火 任曉
ふ様姫乃ちをきき 恋衣 扇風

一六

つとねよりせよ輝りく出芳
秋の志事よりとくや二日月 芭蕉
城依ひて東のうきをぬき 不玉
ひく後よりるのあ—— 依 芭蕉

龍後宮田細川朱菴事

一七

葉輝よりつきのをききとあきく
秋のうきよりるのあきく 月棟雪

かきかきと夕暮と秋のうきをきき 唐也
一とあきく—— 高教のト重良

一八

小細ちと柳葉—— や葉上葉
わきかきより 中乃ちあきく。
二日月のうきよりるのあきく 小春
みそけと菊の下葉つてあきく 重江
眼星—— 羽織よりあきくのあきく 枝
板乃ち四方をめくきき 牧幸

一九

大州

芽出より二葉より柳の葉
白乃ちあきく—— 柳の葉の葉 芭蕉
蛸のあきく—— 柳の葉の葉 芭蕉
人のあきく—— 柳の葉の葉 芭蕉
あきく—— 柳の葉の葉 芭蕉
あきく—— 柳の葉の葉 芭蕉
あきく—— 柳の葉の葉 芭蕉
あきく—— 柳の葉の葉 芭蕉

候ニッさねえかーその常
吉原の土やちの目だけ松いし
後々ぬーろく勝あるま

白 意 不

卷一

菜根之味
文子後集
益

邑差

武士の大根くきけりれ
 一とほりり本くきけりれ
 かまきりおぬ紙を困て
 大くきききききききき
 おの葉乃すききききき
 後とてててててててて

叙外

竹庵先生

本

[illegible]

懐と明てうそふ山は
榛相いふ 榛子此方

落枕 秋芳

三

残
石のうしろに
とむるのむ

卷五

すゝてえゝむあれなまゐるし巻
ほろもねえに掉る壁をて一有
板をくぬきしれらとや仕ふ
夕ぬの月まで傘とておく夜中
馬了西山と付てゆく之葛雲

振あれてふれ
 世の中をわたり
 社とく

夕々駕籠と借書人
今より子の手と情

三

日毎うかふ處を尋て

三

と合年ふ桶の本の中
きいて花うう月とてつ 色蕉

月のあれきいれさう詩は作
ハフううう子の歌ほそく 色蕉

一五

とて

いさううきさくさう入水
硯のあうううれお ねさ たる
ねり葉の結しううううは 想風
二十余年 ううれ息さう 野人
あお山のううう月の四やう 妻考
故むつさうとやういれ 胡江

一六

詩六

ううれ名とむけううやまう
ううて城うううううう
梅堀うううううううう 路通 弱

一七

とて

市うううううううう
酒のうううううううう 梅抱月
物うううううううう 杜園

一八

とて

うううううううううう
おてや掃ううううの葉うう 色蕉
七夕うううううううう 色蕉

一九

とて

うううううううううう
うううううううううう

終る日なり
色
うけ
其の中は焚の火乃並ひて

赤

其面志や平月 毎日二里の旅
角豆を
子乃を

素堂

深きぬ
意乃笛吹く
新ふく

為

古の
思ふ

旅人
乃

秋風

あきく
日乃

写

を

面
おと

田

主人

秋
月

貞亨丁卯仲秋末五日

やうに之圃はいつか母をよわく
あの人なり或はあまふといふを
そよふとわがきとて衣あふり
おひて他号と改め古座とてふ

離るしてあまふと名のうかみれ

古座乃さくくくくくくくくくく 古圃

當れ病はひくくくくくくくくく 翁

作すふくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
めくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくく

曾良

瑞衣早苗はけき食らん
あふれけあやわたりき色あ
友いのもいのききくくくく 音那

かきり

市乃子枕のきくくくくくく
日あふくくくくくくくく 西原

あふれきあふれきあふれき とき

あふれきあふれきあふれき とき

善佐幸

あふれきあふれきあふれき とき

酒

あふれきあふれきあふれき とき

二二
き菊井隣のあやや甘大根
冬は—— 竜口 水 意の標 芭蕉
月とるふのうらうらと連て疎 龍泉

とるふ

二三
うう山—— 浮世のわ乃山さう
香 清のこ象 細根太根 夕空
人足乃と雲うそゆら雲ゆり 玄来

あやや

色草

二四
あややや書ゆく夜の音新
あややや書乃こ象かき井 小店
校勘方けしきふはくふうて史郎

あややややの白き 史郎

里園

二五
あややや書乃に書乃山底の乳

あやややのあややうう象 佐園
大根のうううあややううううう 玄来

登つて登かひ大の森はて 野に

とて代

百葉や杉の木はちよいろと子
笠をねくわう山公家信化
隣ういひゝ雛の解れて去来

色蕉

湖水うきり新うきり石のま
信よまづいていに取人又子
ふりや友うきり又もて 伴六

具用

春晴し野ハ蝶多うちうく
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
お代のあやめき年うきりさよ

色蕉

卯うきり女をまきり冷まゝに
香うきりあやうきりうきりま
いろゝれきとるうきり月代て 龍毛

一九四

枯枝うきり鳥のうきり秋のうきり
うきりうきりうきりうきり

色蕉

一九四

柿の櫓むう松乙木は葉
うきりうきりうきりうきり

答山

一九六

夏草も東海もくくくく
うきりうきりうきりうきり

知足

一九七

芭蕉野合其白草舞之あや
月とみらを酒乃を食芭蕉

季下

一九八

古池や梅うきりうきり
うきりうきりうきりうきり

芭蕉

一九八

宿多うきりうきりうきり
うきりうきりうきりうきり

芭蕉

とて代とて代とて代とて代
うきりうきりうきりうきり

芭蕉

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

三〇 秋の夕べは 楓の葉の 色は 葉の陽は 残る言は 色は 色は

惟此

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

三三 此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

此の酒は昔の酒に
味は少しも違ふ事な

月代やひさしをさす青の宿
秋をさすさるむしや灯正秀

曲歌

葉種千んむしらの燈や夕露

管通り 葉種乃を色花

珍頊

いりくの名をむつや春の草

くまのく蝶乃春の草のる色花

世を秘とて花の白き花里 色花

あけのう入枝実地と花のる

角のさうの力半とあつもの土芳

画賛 珍頊

赤く今一はのほ操姫

かりさくさく公家の振袖色花

をさけくをさけの衣

実りとあふ會ふはゆき草

かきと花をうけとあつもの他房

花の白きくわくをさけく

中絶し一人居る

雪芝

水々や雪片は雪のこゑ
梅は雨の如くぬれむ

色苴

三寺やちり男家と帝の兩
橋をとりおしそけの懸待 知足

色道

櫻本乃如ふふふふふふふふ
あまのちとととととととととと
秋風

芭蕉

人地の起例一書の事云々

邑通

くすくすはむさうとて、おのれが
ひしうききぬ年うとしは老起倒

王

梅はくまや語をぬき
杉葉より分る牛二つる一つ秋也

杉藁 3 斗 5 升 2 匁 1 分 1 厘

如行、旧芳、
古入、

仁

古
人

子
子
女
力
子
子

古
十
三
五
七

公弼

負事の時、
すの系、
たつ

邑

三
あつたふりて解くは
あつたふりて解くは

NE

相
葉

三
君子の修へむと云ふは
修身の要なり
修身の要なり

何
才

邑道

居るを
 ぬく
 のち
 甲斐あり

公孫

三三
後方ありく 猫乃きる
人なりぬ中をさ煙より容
師を乃日救れり 楯と所

三三
鏡つくり終り 古寺
旭ふけ山松の雪の跡あり

三三
村の虫店より 葉く律家
嫁とをいせとて 姑とあり

三三
暖うり 湯の葉原にひん
ちり ちりく 返り葉建

三三
比の毛多うはと ちり 湯が
雪のこけ中 ちり ちり

三三
佐ふと ちり ちり ちり
大和所 入る ちり ちり

三三
金補乃 ちり ちり ちり
さけ ちり ちり ちり

三三
市橋 ちり ちり ちり
大和と 細部 ちり ちり

三三
庭 ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり

三三
枯 ちり ちり ちり
西 ちり ちり ちり

三三
山 ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり

三三
雪乃 ちり ちり ちり
山 ちり ちり ちり

草場五郎 小男席の角

三三 是れを晴し〜さるるに
及くえあれ 小伴好よ

三七 是乃石のありさにつく
世の恨み事さるるのあやかし

三八 松を過ふ庭のあやかし
甲乃徳利を〜むさるる

三九 藤乃棚〜さるるに
喜代房のあやかし

四〇 松乃草履のあり〜のあやかし
石ぬ〜おきさるるを懐く

四一 夕食のあり〜さるるに
松のあり〜懐く

四二 人聲の仲よ何を懐く〜
松のあり〜懐く

四三 是れを文つ〜さるるに
松のあり〜懐く

四四 草履のあり〜さるるに
松のあり〜懐く

四五 松のあり〜さるるに
松のあり〜懐く

四六 松のあり〜さるるに
松のあり〜懐く

四七 松のあり〜さるるに
松のあり〜懐く

いゝととよむ子鹿のうら
二町ほく西は破乃てゆき

三五六

板へぬれ豆く試ふく
きさ煙はにけは指すむく

三五七

小侯うさういかにさうわね
お舞の鈴とよきふはるめて

三五八

わゝ意は色残ともてさういさう
又司うは戸はげれらさう

三五九

ほとさうてならふさき
夢有て無夢は入隆の恨

三六〇

使わたりく暖めうけ
又級うさうた、石をさうり

